

魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚病対策指導事業・水産用医薬品対策事業)

勢村 均・堀 玲子・岡本 満・福井克也

山根恭道・若林英人・松本洋典・栗田守人

1. 研究目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び養魚指導・相談を行なう。

2. 研究方法

種苗生産場、中間育成場、養殖場を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導、助言を行うとともに、疾病発生時には迅速に現地調査や魚病検査を行った。また、天然水域で大量へい死が起こった場合も現地調査や魚病検査を行った。

魚病の検査方法は主に外観及び解剖による肉眼観察、検鏡観察と細菌分離を行なった。細菌が分離された場合は、薬剤感受性検査（ディスク法）を実施し、治療・対策方法並びに水産用医薬品の適正使用について指導を行なった。また、KHV 病や VNN 症等については PCR 検査を実施して原因ウイルスの存在を確認した。

なお、アユの冷水病とエドワジェラ イクタルリに関しては「アユ冷水病対策事業」に別途記述した。

3. 研究結果

今年度の魚病診断件数は、隠岐地区海面 5 件、出雲地区海面 11 件、石見地区 7 件、内水面 26 件（うち KHV 検査 18 件）であった。主要なものとしては以下のとおりである。

出雲地区では、アカアマダイ種苗生産に関連して天然海域の親魚の VNN 原因ウイルス保菌状況を周年検査した。その結果、すべて陰性であった。しかし、種苗生産中にエピテリオシステス類症が発生し、1 水槽が全滅した。また、種苗生産中や養殖中のメガイアワビに飼育技術が原因と思われる斃死が見られた。

石見地区では養殖のヒラメに連鎖球菌症やハダムシ症などが発生した。また、食品への異物混入に対する相談も多かった。

隠岐地区では 8 月に養殖ブリが斃死し、栄養性疾病が疑われた。

内水面では、今年度を実施した KHV 検査は、天然水域で 2 件（2 尾）、個人池・公共水域で 7 件（25 尾）、定期検査（養鯉業者 4 社、宍道湖）9 件（51 尾）の合計 18 件 78 尾の検査を行い、うち 6 件で陽性が確認された。また、KHV 以外では、ヤマメ、コイ、アユなどで細菌性疾病の発生が見られた。

海面（出雲地区、石見地区、隠岐地区）及び内水面の疾病発生状況及び診断状況の詳細については付表（添付資料）に記述した。